

スーフイズムの「中国的」諸相
——ムジャッディディーヤ科研中国北西部地域調査報告——

川本 正知、黒岩 高、中西 竜也（共同発表）

I. 「ムジャッディディーヤ科研における中国北西部地域調査の位置づけ」（川本）

1. アフマド・シルヒンディーとムジャッディディーヤの調査研究

現在まで、日本学術振興会の平成 25 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（海外学術調査））「研究課題名 アフマド・シルヒンディーとムジャッディディーヤの調査研究（課題番号 25300023）」によって以下の地域での写本調査・収集および現存するナクシュバンディーヤ・ムジャッディディーヤ教団の調査が行われた。

現在までの調査

2013 年 8 月 トルコ

イスタンブル 写本収集（スレイマニエ図書館、イスタンブル大学図書館）

アドゥヤマン メンジル・ジャマーア

レフケ（北キプロス） ハッカーニー教団（Muhammad Nazim Adil al-Qubrusi al-Haqqani の教団）

2013 年 9 月 イギリス写本・石刻本調査・収集

ブリティッシュ・ライブラリー

オックスフォード・ボードレアン図書館

2014 年 2～3 月 インド

デリー バーキー・ビッラー廟 ゴラーム・アリー・ハーンカーフ

カーンプル

ラーンプル

シルヒンド アフマド・シルヒンディー廟

2014 年 8 月 中国北西部地域（後述）

2014 年 9 月 ウズベキスタン

ホラズム

フェルガナ

タシュケント東洋学研究所写本調査

当研究発表では「中国北西部地域調査」の報告をおこなった。

2. 中国北西部地域調査 (2014年8月1日～21日)

参加メンバーは発表者3人のほか東長靖(京都大学)、8月15日以降は現地研究協力者として馬平(元・寧夏社会科学院回族伊斯蘭教研究所所長、現・同研究所研究員)が加わり以下の日程で中国北西部地域のスーフィー諸教団を訪ねた。

- 8月1日 日本→北京→蘭州(川本、東長、中西、黒岩)
- 2日 蘭州: 情報収集
- 3日 蘭州→臨夏
午前中、蘭州東川大拱北(馬明心の廟)
- 4日 臨夏: 明德清真寺、明德拱北
- 5日 臨夏: 明德拱北(早朝ズィクル調査)、大湾頭拱北(東郷族自治県)
- 6日 臨夏: 大拱北(國拱北、台子拱北)、華寺拱北
太巴巴拱北、畢家場拱北
- 7日 臨夏→循化
- 8日 循化: 街子太爺拱北(撒拉教門宦)、街子清真大寺
- 9日 循化: 文泉堂拉辺拱北((文泉堂の塔頭の一つ)、明源堂(四門通行二代教主の廟)
- 10日 循化→蘭州
- 11日 蘭州: 五星坪地区の靈明堂、クブリーヤのアブド・アルカーディル・ジーラーニーの息子のアフマド・カビールの西坪拱北、海太巴巴拱北
- 12日 蘭州→銀川(中西、川本) 東長、黒岩 帰国
- 13日 銀川: 南関清真大寺(モスク)
- 14日 銀川: 西夏王陵、賀蘭山岩画
- 15日 銀川→吳忠→同心(馬平先生の車)
吳忠: 鴻楽府拱北(ジャフリーヤ沙溝派)、板橋道堂(ハーンカーフ)、吳忠南大寺(ジャーメ・マスジド)、四旗梁子拱北
- 16日 同心: アマル中の洪崗子拱北(洪崗)、『沈黙の歴史』著者の馬軍と会食。
- 17日 午前中: 同心
石塘嶺の石塘嶺拱北(アブド・ラフマーン(石塘嶺門宦の祖)の墓廟)

市内に帰ってきて石塘嶺門宦の現シャイフ宅訪問

同心清真大寺

午後：同心→固原

18日 固原：羊圈堡貫地沙溝拱北（クトゥブ・アッパース老大爺拱北）、九彩坪
拱北、須弥山石窟、二十里舖拱北

19日 固原→蘭州

20日 蘭州：文泉堂拱北（馬文泉廟）、隍廟

21日 蘭州→北京→日本

II. 「中国のスーフィズムとスーフィー教団——歴史的概説——」（黒岩）

本発表の第二部では、黒岩が、中国におけるスーフィー教団（門宦）の形成と展開について概説するとともに、「中国北西部地域調査」の結果をふまえた、新たな問題の提起と議論を行った。その要旨は次のとおりである。

中国における門宦の形成・展開は、大きく三段階に分けられる。まず、17世紀半ば以降に、西方からの聖者の到来によって、畢家場、穆扶提（ナクシュバンディーヤ＝フフィーヤ系）、大拱北（カーディリーヤ系）、張門（クブリーヤ系）などの諸門宦が結成される。これが第一段階である。

次いで第二段階は、18世紀前半に訪れる。この頃から一部の中国ムスリムが、既存の門宦の教えに飽き足らず、「真伝」を求めて西方に遊学（「西方取経」）し、新たな教団を創設するようになる。具体的には、馬來遲（1681?–1766?）が華寺（フフィーヤ系）、馬明心（1719?–1781）がジャフリーヤ（ナクシュバンディーヤ＝ジャフリーヤ系）をそれぞれ創始したことをいう⁽¹⁾。

第三段階は、19世紀後半以降の動向を指す。「西方取経」が普遍化する中、①新教団の創設に加えて、②既存の教団の教義の強化や、③既存の教団からの分岐といった動きが見られるようになる。また、この時期の特徴として、複数の道統を継承・伝授する門宦や、ラッパニーの学理の影響を受けた門宦の増加があげられる。具体的事例としては、①ムジャッディディーヤの北荘、文泉堂、撒拉教といった各門宦の成立〔馬通 2000: 198–210, 254, 260–263〕、②臨洮拱北の第八代教主馬成章（1871?–1952）が二度の聖地巡礼を果たして

⁽¹⁾ これらを第1、第2段階とする観点は、〔黒岩 1994: 4–13〕より翻案したものである。

フフィーヤの学理を学んだこと〔马通 2000: 197-198〕、③華寺の馬如彪がシャーヅィリーヤの免許を得たと称して 1880 年代ごろに新派を創設したこと〔马通 2000: 171-172〕が挙げられる。

中国では、このようにして様々な門宦が成立したが、いっぽうで、それらがフフィーヤ、カーディリーヤ、ジャフリーヤ、クブリーヤのいずれかに帰属するという、「四大門宦」の観念が、いつ頃からか出現し、史料上では清末以降に確認されるようになる⁽²⁾。では、「四大門宦」の枠組みは、どのようにして成立したのか。この問題をめぐって示唆を与えるのが、今回の「中国北西部地域調査」で確認された、次の事実である。すなわち、臨夏の多くの門宦の間で、儀礼書、思想書、宗教儀礼などが類似している、もしくは共有されている、ということである。

中国の諸門宦は、もともと信徒獲得のために教義・儀礼をめぐって互いに争う傾向にあったが、その事態は清末から民国期に大きく変化したのではないかと考えられる。というのも、そのような「争教」は、しばしば中国西北部におけるムスリム騒乱の原因となった。ゆえに、門宦の存在は為政者から危険視されるようになっていったからである。とくにそれを決定的にしたのは、清末光緒年間の「河湟起義」の善後策を担当した楊增新（1864-1928）の「門宦廢絶」論であった（『甘寧青史略』正編卷二十五）。それまでの官僚たちが「邪教か否か」という視点からしか、中国イスラームの門派を見ることができなかったのに対し、楊増新はムスリム争乱の多くが門宦の「争教」を原因としていることに着目し、以降、地方官や統治者の認識は一新するのである。

このような危機への対応として、諸門宦は相互宥和の必要性に迫られるようになったのではないか。また、清末・民国期に、門宦における聖者崇拜を批判したイフワーン派が中国西北部で台頭したことも、門宦間の団結を促したであろう。諸門宦間における教義書や儀礼の共有は、このような背景のもとで進行し、「四大門宦」の枠組み形成も、それとパラレルな現象であったと考えられる。

III. 「スーフィズムの「中国的」諸相——諸教団の実態——」（中西、川本）

本発表の第三部では、訪ねた教団（門宦）、ムスリム聖者墓廟（拱北）のうちから特筆すべきものとして、祁明徳の道統に属する明德拱北、撒拉教門宦の街子太爺拱北、洪崗崗子門

⁽²⁾ 比較的早期のものとして、『河海崑崙録』卷三に「西寧河州為回民聚居地、有四大門宦…」とある。

宦の洪崗崗子拱北、石塘嶺門宦の石塘嶺拱北について紹介した。中西が当該の各門宦・拱北の沿革を概説したのち、川本が現地で撮影した写真や動画を示しつつ調査成果を報告した。

1. 明德拱北

明德拱北は、甘粛省・臨夏回族自治区・臨夏市にある。中心的な被葬者は、祁明德 (Muḥammad Kamāl al-Dīn, d.1987) という人物であるが、一族の墓も併設される。一族の初代とみなされる祁信一 (d.1742、の弟子) や、祁明徳の父親および長男、そして祁明徳の次男でその道統を二代目として継いだ祁介泉 (Muḥammad Ibrāhīm, d.2012) などの墓が確認された。祁明徳は、サウード朝支配以前のマディーナで、スィルヒンディーの子孫 Muḥammad Ma‘šūm al-Mujaddidī al-Madanī とその子 Muḥammad Abū al-Sharaf ‘Abd al-Qādir al-Mujaddidī al-Madanī に師事した [Silsila a: 17-18; Silsila b: 6; Cherif-Chebbi 2004: 411; 鞏阿訇: 30-31]。祁明徳の道統に連なる人々は、フイーヤないしムジャッディディーヤを自認するが、「○○門宦」のような固有の教団名は特にもたないようである。祁明徳の道統に連なる人々を束ねる現在のシャイフは、祁介泉の五男、五師傅こと祁忠明 (Maḥmūd) 氏である。

2. 街子太爺拱北

街子太爺拱北は、青海省・循化撒拉族自治州・街子にある。被葬者は、撒拉教門宦の初代導師、ムーサー (母撒 Mūsā は経名、道号 ‘Abd al-Qādir, d.1900) である。ムーサーは、カーディリーヤ系の文泉堂門宦初代導師、馬文泉 (d. 1882) ⁽³⁾ に師事する [马通 2000: 254, 260, 366] とともに、いわゆるヤルカンド道堂の創始者 Shāh Awliyā の道統 ⁽⁴⁾ に連なる Muḥammad Ghulām Ma‘šūm から教導を受けた ⁽⁵⁾。撒拉教門宦の現シャイフは、ムーサーの孫、韓繼宗 (Şālih) 氏である。

同氏によれば、ムーサーは Muḥammad Ghulām Ma‘šūm からナクシュバンディーヤ＝フイーヤの免許を得たのみならず、ヤルカンド道堂にいた別人から、カーディリーヤ、クブリーヤ、ジャフリーヤの免許をも得たという。このゆえに撒拉教門宦は、「四門通行の

⁽³⁾ 馬文泉は、マッカ巡礼の際に、カーディリーヤのアブドゥルカリム (阿布都里・克勒木ぐ‘Abd al-Karīm) に師事した [马通 2000: 254]。

⁽⁴⁾ Shāh Awliyā の道統 (ナクシュバンディーヤ＝ムジャッディディーヤとクブラウィーヤ) については、九品承传 [273, 274-275, 294] および中西 [2013: 36 (n.19)] を参照。

⁽⁵⁾ ムーサーの弟子、アブドゥルフアッターフ (‘Abd al-Fattāh, d.1938) を創始者とする崖頭門宦の内部伝承によると、ムーサーは華寺門宦の改革者、馬如彪 (d.1895) から、シャーズィリーヤも伝授されたという [马通 2000: 259]。馬如彪については、马通 [2000: 171-175] 参照。

カーディリーヤ」とも自称する。なお、ムーサーがヤルカンドでその免許を得たところの「四門」は、正しくは、フフィーヤ、カーディリーヤ、クブラウィーヤ、チシュティーヤではないかと推測される⁽⁶⁾。

韓繼宗氏によると、伝教のイジャーザは本来一人に継承されるが、継承人以外にルフサ（許可）が与えられて、分派・対立の原因になることもある⁽⁷⁾という。なお、韓繼宗氏自身は、伝教のイジャーザ（免許）と、ズィクルのイジャーザの両方をもつという。

3. 洪崗崗子拱北

洪崗崗子拱北は、寧夏回族自治区・中衛市・中寧県・喊叫水郷・洪崗崗子村（石泉村）にある。中心的な被葬者は、洪崗崗子門宦初代シャイフ（老人家）洪壽林（1852–1937）であるが、境内に二代目の洪清国、三代目の洪維宗の墓もある。洪崗崗子門宦は、ムジャッディディーヤの道統に連なり、ナクシュバンディーヤ＝フフィーヤに分類される。その道統は、新疆アクス付近の Ay Köl (Ay Ghol = 阿印科) に道堂を開設した、「阿印科」として知られる人物（又の名を、衣禪・夏・依合萬・憂里 = Īshān Shāh Iḥwān Jalīl ?）に端を発する。彼は、スィルヒンディー六伝の弟子といわれる。この阿印科の弟子に、馬方（安西大湾太爺）という人物がいた。彼は、もと清軍の部隊長（千総）で、カシュガル・ホージャ家（大小ホージャ）の鎮圧作戦（1758）のさいアクスに駐屯して阿印科に師事したという。道統は、この馬方のあと、西寧の康成太爺→肅州の韓太爺→青海門源の大通老太爺→甘肅景泰の碱溝井老太爺→青海大通の馬棟（涼州莊大爺）と続いて、洪壽林に至る [陈国光 1989: 82; 马通 2000: 219–220]。現在のシャイフは、洪維宗の息子、洪洋氏である。当該拱北では、農曆7月24日に没した洪壽林のための記念活動（アマル ‘amal）が毎年、農曆の7月16–24日（2014年は西暦8月11–19日）に行われる。発表では、2014年の当該アマルの様子を紹介した。

4. 石塘嶺拱北

石塘嶺拱北は、寧夏回族自治区・吳忠市・同心県・崆山郷・石塘嶺村にある。中心的な

⁽⁶⁾ Papas [2011: 77] によると、ムーサーは、Muḥammad Ghulām Ma’sūm から、ナクシュバンディーヤ、チシュティーヤ、スフラワルディーヤ、カーディリーヤを継承したという。

『天方道程啓徑淺説』（ムジャッディディーヤ Ghulām ‘Alī Dihlawī の後継 Aḥmad Sa’īd (d.1860) の息子、Muḥammad Maẓhar によるアラビア語著作の漢訳 [中西 2013: ix]）に、「四大門宦」として、フフィーヤ、カーディリーヤ、クブラウィーヤ、チシュティーヤの名があがる（ペルシア語訳 [Risāla] には言及されていないので、中国的な認識か）。

⁽⁷⁾ Papas [2011: 95] によると、ムーサーの弟子 ‘Abd al-‘Azīz は顕教的教育 (l’enseignement exotérique) を受け、羊毛の法衣を与えられ、もう一人の弟子 ‘Abdullāh は密教的教育 (l’enseignement ésotérique) を受け、絹の法衣を与えられた、という。

被葬者は、石塘嶺門宦の初代シャイフ馬胡子（‘Abd al-Raḥmān, 1794–1880）であるが、境内に息子の馬三秀と、弟子の余得水の墓もある。石塘嶺門宦は、七門もしくは斉門とも呼ばれる [马通 2000: 253]。カーディリーヤを自認し、ムジャッディディーヤの道統に連なるとも自称する（ただし、ムジャッディディーヤとの具体的関係は確認できなかった）。当該門宦については、马军 [2006] が詳しい。初代シャイフ、馬胡子は、ヤルカンド道堂で臥宰容迪尼（Wazīr al-Dīn ?）という人物に師事し、道統を継いだという。なお、ヤルカンド道堂では、カーディリーヤ3種・クブラウィーヤ3種・チシュティーヤ1種のズィクルが伝授されたといわれる [马军 2006: 32]。

謝辞

寧夏回族自治区での調査に際しては、元・寧夏社会科学院回族伊斯蘭教研究所所長（現・同研究所研究員）の馬平先生より、この上なく多大なご支援を賜った。先生ご自身の運転で各調査地にお連れいただいたのみならず、そのご人脈によって、アマルへの参加やシャイフとの面談など、通常は不可能な調査も可能となった。馬平先生のご助力がなければ、当該調査の成果は絶対にありえなかった。馬平先生には、この場を借りて、深甚の感謝を捧げたい。また、馬平先生のお声掛けにより、寧夏社会科学院研究員回族伊斯蘭教研究所研究員の劉偉先生、同研究所助理研究員（山東大学博士研究生）の李華先生、『沈黙的歴史』著者の馬軍先生からも、多大なご協力を賜った。各位にたいしても深く謝意を表したい。

■参考文献

【一次史料】

聶阿訇：明德清真寺 編『聶阿訇』甘肅省臨夏市：明德清真寺、1996年。

裴景福（清）『河海崑崙祿』（西北行記叢萃）蘭州：甘肅人民出版社、2002年。

Risāla: Muḥammad Mazhar Aḥmadī. *Risāla fī bayān-i kayfiyya-yi ‘amal-i sulūk-i Naqshbandiyya*. n.p.: Qādīzāda-yi sharīf-i sharīf-i makhdūm Ibn Qādī ‘Abd al-Raḥīm al-Bukhārī, n.d. (Süleymaniye Library (Istanbul) İzmirli İsmail Hakkı 1209)

Silsila a: Muḥammad Ma‘šūm al-Mujaddidī al-Dihlawī thumma al-Madanī. *Hādhihi silsila al-Naqshbandiyya al-mujaddidiyya*. Linxia: Mingde Qingzhensi, 2000.

※この史料は、もともと Leila Cherif-Chebbi 氏が明德清真寺から提供されたものである。中西は、Thierry Zarccone 氏を通じて、そのコピーをご提供いただいた。この場を借りて、Cherif-Chebbi 氏と Zarccone 氏に謝意を表したい。

Silsila b: 明德清真寺 編『*Hādhihi al-silsila al-sharīfa* 尊贵的西里西来』甘肅省臨夏市：明德清真寺、n.d.

※この史料は、明德清真寺よりご寄贈いただいた。記して謝意を表する。

趙正軒（講解）、花湛露（譯述）『天方道程啓徑淺說』（民国十一年馬福祥重刊本）中國宗教歴史文献集成編纂委員會編纂『中國宗教歴史文献集成之四 清真大典』第十九冊、合肥：黃山書社、2005年、22-34頁。

【二次文献】

九品承传：叶尔羌（资料整理）、『九品承传』香港：蓝月出版社、2013年。

陈国光 1989: 陈国光「略论伊玛目热巴尼及其苏菲学派」『世界宗教研究』1989年第3期、77-84頁。

Cherif-Chebbi 2004: Cherif-Chebbi, Leila. “L’Ahong sourd.” *De’le Arabie à l’Himalaya: chemins croisés: en hommage à Marc Gaborieau*. Ed. Véronique Bouillier & Catherine Servan-Schreiber. Paris: Maissonneuve & Larose, 2004, pp. 407-419.

黒岩 1994: 黒岩高「17-18世紀の甘肅におけるスーフィー教団と回民社会」『イスラム世界』43（1994年）、1-26頁。

马军 2006: 马军『沉默的历史』香港：蓝月出版社、2006年。

马通 2000: 马通『中国伊斯兰教派与门宦制度史略』银川：宁夏人民出版社、1983年。修订本、第三版第四次印刷、2000年。

慕壽祺輯著『甘寧青史略』（影印版）臺北：廣文書局、1972年。

中西 2013: 中西竜也『中華と対話するイスラーム—17-19世紀中国ムスリムの思想的営為—』京都大学学術出版会、2013年。

Papas 2011: Papas, Alexandre. *Voyage au pays des Salars (Tibet oriental, début du XXIe siècle)*. Paris: Cartouche, 2011.

(奈良学園大学)

(武蔵大学)

(京都大学)